

# 全国病院・クリニック訪問

## 田中内科 大宮糖尿病 クリニック

〒330-0846  
さいたま市大宮区大門町 2-94  
福呂屋ビル 5階  
TEL : 048-643-3333  
URL : http://www.tanaka-dmc.jp/



院長：田中隆久先生  
Tanaka, Takahisa

### スタッフ

医師：常勤 1人  
(糖尿病専門医, 糖尿病研修指導医)  
看護師：常勤 1人  
管理栄養士：非常勤 1人 (CDEJ)  
受付：常勤 1人  
CDEJ：日本糖尿病療養指導士

### 指導・活動内容

●糖尿病外来, 内分泌外来, 一般内科  
外来, 禁煙外来, 療養指導, 栄養指  
導, 糖尿病友の会 (大宮そらの会),  
診察・病診連携

### 施設・設備

診察室, 療養指導室, 検査・処置室,  
バリアフリートイレ

### 検査体制

心電図, 血糖・HbA1c・尿一般半定  
量検査を院内で実施。ほか検査会社  
に外注したり, 他院に依頼したりして  
います。

(2016年9月現在)



開業時, それまで田中先生が勤務していた病院の有志の皆さんから贈られたという時計。似顔絵に田中先生の人柄がよく表れている。

## 穏やかな笑顔に隠された堅い意志により 地域の糖尿病医療に貢献する

今回訪問する「田中内科 大宮糖尿病クリニック」は, 大宮駅東口エリアでは唯一の糖尿病専門クリニック。患者が通い続けやすいことを第一に考え, 院長の田中隆久先生は駅徒歩3分の現在の立地を選び2016年1月に開業された。

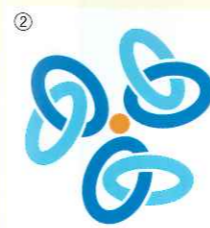
田中先生は当初, 大学の工学部を卒業し大手重工業メーカーに勤めていた。しかしご自身の体調不良をきっかけに, “プロ意識にあふれ, 親身になって患者の不安に向き合っ

れる” 医師になりたいと在勤から医学部を目指し, 医師への道を歩き出したという経歴をもつ。田中先生と訪問者の吉田昌史先生とは, 田中先生が週1回, 自治医科大学附属さいたま医療センターで外来診療されていることもあって旧知の仲。取材は終始和やかな雰囲気が進んだ。大学とも密接に連携されながら田中先生が目指す理想の糖尿病医療とは, どんなものなのだろうか。



① 田中内科大宮糖尿病クリニックのみなさんと吉田先生。

**田中先生** (写真中央) 「当院の理念は『明日も笑顔でいるために, わたし達はあなたをサポートします』です。ようやく軌道に乗った部分もありますが少しずつ新しいことにも挑戦し, 将来はフットケアや透析予防にも積極的に取り組みたいと考えています。患者さんがまた来たいと思えるようなクリニックに成長していきたいですね」  
**看護師の田沼さん** (写真右端) 「初診時の患者さんは病気の心配と緊張のあまり, ほとんどの方が不安そうな顔をしていらっしゃいます。診察前のバイタルチェックをしながらお話をお聞きし, 少しでも不安を取り除けるように心がけています。また, 糖尿病治療で欠かせない検査による患者さんの苦痛を, 少しでも減らせるよう日々考えながら採血しています」  
**受付医療事務の飯塚さん** (写真左から2番目) 「笑顔は相手に対する好意や親しみだけでなく安心や信頼感をもたらすと思います。日頃から笑顔や挨拶を絶やさず, 気軽に声をかけていただける雰囲気をつくっておくことを心がけています」  
**ボランティアの大塚さん** (写真左端) 「病気に対する不安を抱えて来院する患者さんが待合室でわたくしとの会話で少しでも心穏やかでいていただけるよう, 日々のお会いを大切に, わたくしもお仕事を楽しんでいます」



TANAKA CLINIC

② 田中内科大宮糖尿病クリニックのロゴマーク。田中先生「6つの円はインスリンの六量体を表しています。円が青いのは糖尿病予防のシンボルであるブルーサークルのイメージです。中心の垂鉛にあたる部分には大宮のシンボルカラーであるオレンジの点を置きました。濃い色のブルーサークル3つは“T”の文字をかたどってもいます」



③④ 受付カウンターに施されたレンガ製の馬のレリーフ。立体的な造形で迫力満点。煉瓦職人・高山登志彦さんの作。足の部分はカウンターの局面から飛び出している。「馬は自分の足で走り回れる象徴であり, 糖尿病患者さんがいつまでも自分の足で歩けるようにという願いが込められています (田中先生)」



⑤⑥ シンプルな診察室。デスク上のモニター下に, さりげなくインスリンキット製剤のサンプルが置かれていた。患者にすぐ説明でき, その場で単位合わせの手応えや注入時の押し加減を試してもらうこともできる。



⑦ 処置室横の検査機器スペース。⑧ 栄養指導室。療養指導のほとんどがここでされる。あえて医療施設らしくないテーブルや椅子を設置し, IDや数値の手入力による負担が軽減され, ミス防止にも役立っている。



⑨ 待合室。こちらも医療施設らしさを感じにくい日本製家具が揃えられている。黒地と濃い色の木材が落ち着いた雰囲気を醸しだしている。

## 医師・医療スタッフの視点

訪問者 吉田昌史 Yoshida, Masashi 先生  
所属 自治医科大学附属さいたま医療センター 内分泌代謝科



### ① すべては患者さんが基準 一積極性と合理性の両輪一

診療の人数は1日に30~40人が限界だろうとおっしゃっていました。これは患者さん一人ひとりに時間をかけたいという気持ちの現れでしょう。管理が難しくなる負担を顧みずインスリンを院内処方しているのも, 患者さん中心で考えていらっしゃるからこそ。合併症まで含めて田中先生が自分で責任をもって診ようという積極的な部分と, かといってすべて自分で抱え込むのではなく, 専門でない消化器や循環器に関しては連携をとって診てもらうという合理的な部分とが共存しているように感じました。患者さんにとって何が最善かを基準にして何事も考えていらっしゃるのだと思います。

### ② 地域・大学病院との強い連携 一先生の人柄が生む固い絆一

理想を言えば, 糖尿病患者さんは最初は入院したほうがいいんです。自己流になってしまう前にしっかりした自己管理を身につけてそれを一生続けてもらう必要があるからです。でも実際には入院できない患者さんも多い。そんなとき田中先生のところだったら入院に匹敵するようきめ細かい治療を外来でやってもらえることがわかっていきます。大学病院側として患者さんを紹介しやすいですね。こうした地域や大学病院との連携においては, 田中先生の人柄も大きな役割を果たしているように感じます。「田中先生だから」お互い助け合いたくなるんです。

田中先生は内分泌疾患の治療にも積極的ですが, 難しい検査をしなくてはいけない場合に大学病院との連携が生きます。大学病院との連携は患者さんに安心感を与える利点もあると思います。

### ③ 臨床研究への高い意識

#### 一研究者として医療に貢献する一

取材のなかで, 自分の治療データを記録し論文として発表していくことで医療の進歩に貢献していきたいという臨床研究への高い意識がうかがえました。一人ひとりの患者さんに対する責任をまっとうすると同時に, 患者さんへの治療が本当にうまくいっているのか, 将来的に自分の治療方針が合っていたのかを検証するという, 医師としての責任を同時に果たされたいとお考えなのだと思います。大学病院との連携には倫理委員会を臨床研究に活用できるメリットもあるかもしれません。

そんな田中先生に診てもらう患者さんは幸せだろうと思います。

⑩ インスリン製剤専用の冷蔵庫。インスリン製剤を院内処方として, 患者の経済的・手間の負担を軽減している。

⑪ 吉田先生「田中先生の糖尿病医療にける情熱が手に取るように伝わる取材でした。今後も地域連携などを通じてともによりよい糖尿病医療を目指したいと感じました。本日は誠にありがとうございました」

